西浮通信

令和５年１１月３０日
ＮＯ．３９７
東京都北区立西浮間小学校
校長　小島　みつる

「と」の大切さは･･･

校長　小島　みつる

熱中症対策とインフルエンザ感染予防、冷房と暖房、半袖シャツとダウンジャケット･･･異なる季節モノが入り乱れた感のここ１～２ヶ月でした。やっと季節が落ち着いてきたかな、と思ったらもう師走です。

西浮っこたちは、運動会で付けた力、伸ばした力を日々発揮し、今は３年ぶり（規模的には６年ぶり）の音楽会に向けて、学年みんなの「息を合わせて」練習に取組んでいます。慣用句の「息が合う」は「両方の調子や気持ちがぴったり一つになる」という意味です。息を合わせることは、気持ちを合わせることにつながります。音楽会の練習を通して、上手に声を、息を、気持ちを合わせることができれば、けんかやいじめも少なくなるはずです。

さて、「学校」には、「子ども」**と**「保護者」**と**「教師」が存在します。教育は「教えるもの」**と**「教わるもの」との信頼関係の上に成り立っています。「子ども、親、教師」の三者が互いに関わり（つながり）をもつことで、教育を確実に進めることができるのです。この「**と**」は三者を結びつける鎖のようなものではないでしょうか。どれか一つがはずれてもいけません。この鎖が太いものであればあるほど、結びつきは強固なものになるはずです。

また、教育は知識を詰め込むだけでなく、心の成長を促してこそ、知識も自ずと身に付いてくるものです。運動会の練習や本番を通して実感した「仲間と協力すること・助け合い思いやること」、音楽会の練習を通して頑張っている「皆の息を合わせる」こと･･･授業以外の活動を充実させる中で、実は教科の学習も充実していきます。まさに心と体の成長と知力の充実が図られたことになります。

子どもの成長過程には「教わる力」と「育つ力」の二つがあります。その力を確実に育てるには時期があります。保護者と教師からの温かい、時には厳しい言葉も不可欠です。学校教育の場が、様々な活動を通して子供たちを育てる場でありたいと考えています。そのためには、「子ども」**と**「保護者」**と**「教師」**と**が、「触れ合い・話し合い・助け合い」を大切にしながら、「**と**」を太い鎖にしていくことが大切だと感じています。

今から約１１０年前の大正初期に当時の学校から家庭へのお願いとして書かれた「家庭訓育」というものを見つけました。

一　学校より家に帰れば父母長者挨拶して学用品を一定の場所に仕舞いたる後、父母の仕事を手伝ひし手伝う仕事が無き時は、約三十分間復習を為したる後父母の許しを得て遊ぶこと。
二　家を出る時、家に帰りたる時は必ず挨拶を為すこと。帰宅は必ず日没前に為し帰宅せば庭前及び座敷を掃除したる後、点灯の用意を為すこと。
三　夕食も一家揃ふて為すこと。
四　食事前後とも挨拶を為すこと。
五　学校にて教えを受けし事柄を食後三十分間一家の者に対して物語を為すこと。昼間に復習を為さざりし時は復習すること。
六　夕食後一時間経過せば寝具を出し寝に就くこと。寝室に入る際は父母長者に挨拶すること。

今も１００年前も、学校**と**家庭が両輪となって子ども達の成長のため連携していたことがわかりますね。

１２月１６日（土）の音楽会をお楽しみに！